文化・芸術

「茶の風景」
1940年3月、油彩、カンバス
50・0センチ×73・0センチ
（岩手県立美術館蔵）

松本竣介（1912～48年）

〈名画の扉〉

大川美術館企画展から

「針金のやうな黒い線がのさばりかへつてゐる」「何となく線といふものに魅力を感じながら油絵を描いてゐた」と自問しつつ、新たな造形を追求していった松本竣介。1940年、対象を半具象的にとらえ、絵画の造形性が前面にあらわれた一時期がありました。これまでのモンタージュ風な「街」にみられた交錯する黒い線描は影をひそめ、かわって大小さまざまな立方体や、色面の量感で構成する表現が試みられます。

本作は40年10月、日動画廊で開催した初個展の出品作です。20号、30号大の近作を中心に30点が並びました。この個展に際して竣介は次のような一文を記しています。

「―絵を描くことが好きでありながら、画家になる望みを一度も持たなかつた僕が、十四歳の時に聴覚を失ひ、この道に踏迷ひ十五年の迂路を経た今日、やうやく、絵画を愛し、それに生死を託することの喜びを知り得た」

暗転してゆく時代のなかに竣介の自立の意識が感じられます。

（小此木）